

小泉 幸久

現在の日本の会社は、厳密に経営計算をすれば、おしなべて赤字であるといつて差支ない。謂わば過去の遺産の上にあぐらをかいて一応破綻を免れているというのが実相に近いように思われなければならない。

今日の経営陣の中で、おそらく殆んどすべての人はとつくにこの実相に気づかれているにちがいない。しかしかかる認識に立つて果敢に現実に挑戦する勇氣を持ち併せている人は、案外少ないようである。

もとより敗戦とインフレにさいなまれた日本經濟の担い手である企業に固疾する弱点は深く且重い。徒つてその再建は五年や十年の短時日では到底望めないし、或は半世紀も一世紀もかかるものであるのかも知れない。しかし、それだからといって現実に挑戦する努力を怠つていいというジャステイフィケーションは出てこない。

古河電工の小泉さんは、つとに均衡経営の理念を追つて精進されている少数の経営者の一人だ

あると思う。ここに、三年、小泉さんの精力は安定株主の獲得に主眼がおかれていたようで、全国隅々まで歩いて地方銀行筋との協調に努められた。毎年八月という月は会社の交際費を一文も支出しないという慣例をつくり上げて実践されている。過去の設備やストックに化体されている所謂ふくみ、みを利用すれば高配当が考えられるが、小泉さんはふくみ、みの利用を厳禁し当期におけるありのままの数字を株主に披露し、経営の実態に深い理解を求められ、無理な配当をしないと、う鉄則を貫かれている。労組に対しても、もとより安価な妥協をしないという態度で終始されている。労働、資本、経営の三者の間に揺るぎない均衡を打立てようと日夜心を砕かれている姿に、われわれは高僧の佛を偲ぶことができるような気がして、私淑の念を禁じ得ないものがある。

(昭、三〇・八)